

VTSJ STEP3 レポート

What more can we find?

京都造形芸術大学
アート・コミュニケーション研究センター 研究員
北野 諒



“ What more can we find? ”

これからの日本におけるVTSの発展に向けて、また各人の実践の中でのチャレンジに向けて、他にもっと可能性はないだろうか——。一年間に及ぶ「連続セミナー ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー」のSTEP3最終日、フィリップから受講生に向けてまさに「3つめの問い」が投げかけられ、セミナーは大団円を迎えた。

本稿では、2012 / 3 / 27 ~ 4 / 1の6日間、京都造形芸術大学にて開催された「連続セミナー ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー STEP3」の概要をレポートする。セミナーの背景 / 目的など、基礎的な情報は既にSTEP1 - 2のレポート及びVTSJのHP上にて紹介されているので、ここでは割愛する。また、美的発達段階理論、コーディングなどに関しても、重複と無用な混乱を避けるため、ここで再び解説を加えることはせず、さしあたり必要な範囲で言及するに留めている。

つまり、本稿は仔細なレポートや、セミナー内容の教科書的まとめというよりも、いち参加者としての筆者がみて、考えた、6日間のセミナー体験の大まかなスケッチである（あるいは筆者が「STEP3の6日間」を対象に一人でVTSを行っているようなものだ、とも言えるかもしれない）。本稿が、受講者の方（あるいは後に情報に触れる方）にとっての振り返り / 発展的思考のための、1つのナビゲーション、地図のような機能を果たせば幸いである。

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目
am	オープニング 全体ディスカッション	鑑賞者の分析 (物語の段階)	鑑賞者の分析 (構築の段階)	シークエンス・ エクササイズ	シークエンス・ チャート筆記 エクササイズ	批判的思考の コーディング
pm	コンディショナル 言語の紹介 実践練習	フレーミングの 紹介 実践練習	シークエンス・ エクササイズ	シークエンス・ エクササイズ 全体発表	応用実践例 (地図、詩、科 学)	自らの筆記サン プルのコーディ ング

1日目

緊張と期待の入り混じった空気の中、1日目が始まった。しかしある種の「硬さ」も束の間、フィリップが会場に入り、ディスカッションが始まると、すぐに互いの対話に自然と集中が高まっていった。2回の事前ミーティングと、各々の実践を経て、午前中のディスカッションでは、実践に際してのより具体的な問題（どのように同僚にVTSを理解してもらうか、どのように参加者のモチベーションを高められるか）が多く挙がっていたように思う。

場がほぐれたところで、午後からはパラフレーズをより精緻化する「コンディショナル言語」の解説がフィリップから行われた。コンディショナル言語とはつまり、パラフレーズにおいて「あなたは」「～かもしれない」といった部分を強調することで、ある解釈が1つの可能性であり、他にも複数の可能性があるということを示唆する方法である。これまでの実践でもすでに意識的 / 無意識的に行っていた受講者の方も多かったであろうこの方法について、しかし改めて1つの枠組みとして言及されることで、より自覚的にパラフレーズに活かせるようになったのではないだろうか。

各グループに分かれての実践練習では、この解説が奏功して、繊細な言葉の使い方に対してのアドバイス、振り返りが増えていたようだ。コーチングに関しても、受講者の方の間で自然発生的になされており、VTSの「型」を単になぞるのではない、柔軟な対話生まれつつあるように感じた。また、コンディショナル言語と関連して「この作品はコンディショナルなパラフレーズに適しているかどうか」という問いがあったが、これはつまり作品選びの条件である「多義性 ambiguity」と直結する視点であろう。

2日目

2日目は、アビゲイル・ハウゼン (Abigail Housen) による「美的発達段階論」の再確認から始まり、特に「物語の段階」の鑑賞者に関して、より詳細な分析が展開された。ハウゼンが美的発達インタビュー (ADI) サンプルから美的発達段階を分類する際に用いた13の思考カテゴリー（の内、特に主調を成す3つのカテゴリー）が紹介され、実際に物語の段階の鑑賞者のVTS前 / 後のADIサンプルを検討する、ややテクニカルな作業が行われた。

しかしここでの目的は、フィリップが強調していたように、思考カテゴリーを「おぼえる」ことや、実際に美的発達段階のコーディングを練習することにあっただけではない。あくまで実際のファシリテーションに際して、鑑賞者の思考パターンを理解し、それにうまく対応した働きかけを行うための手がかりを掴むためのものであったと言えるだろう。

午後からファシリテーション実践に戻り、前日のコンディショナル言語に加え、「フレーミング」という方法がフィリップから紹介された。フレーミングとはつまり、鑑賞者の発言内容の大枠の意図を汲みとり、「小見出し」をつけるようにパラフレーズすることで、「いま、何について、どのような観点から話しているか」をまとめ、対話の文脈を提示することである。フレーミングを効果的に用いることで、例えば「パラフレーズが非常に長くなってしまふ」といった問題を解決することができるだろう。

しかし、フレーミングに関してはファシリテーターが、対話の中で起こる複数の文脈を常に一步引いた視点からまとめていくことが要求されるため、各グループに分かれてからの実践練習では、一筋縄ではいかないと感じられた方も多かったようだ。また、作品とフレーミングの関係性についての問いがあったが、「フレーミングに適切 / 不適切な作品」という観点よりも、描かれている要素が多く、多義性、作品から読み取られるテーマが複雑になるにつれて、フレーミングの果たす役割が増していく、と考えるべきであろう。



3日目

前日に引き続き、午前中は鑑賞者のADIサンプル分析からスタートした。ただし3日目は「構築の段階」を対象としており、思考カテゴリーに「疑問」や「比較」などの新たな項目が加わり、主に6つのカテゴリーにしたがってADIサンプルの検証が行われた。重ねて強調しておけば、ここではコーディングの習得ではなく、VTSが主に対象とする「物語・構築の段階」の特徴を、各人がよりよく理解するための視座の提供が目的とされていた。各々が、自分なりの仕方でも各段階の思考パターンを理解し、実践と理論を自在に往復できるようになることが肝要である。

午後からは各グループに分かれ、STEP2でも行われた、シークエンス・エクササイズ（異なる美的発達段階および年齢の鑑賞者グループを3つ想定し、3作品のシークエンス×3つを作成する）が行われた。受講者の方から提出された作品画像に、フィリップから提供された作品画像が加わり、総数100以上のイメージからのシークエンス構成が試みられた。

シークエンス作成にあたって、おおまかに整理すれば、**1)** 美的発達段階の観点、**2)** 対象者の年齢、経験、環境などの観点、**3)** シークエンス自体のテーマ性の観点、の3つのポイントがあり、その全てに共通する基礎として「作品選びの基本原則」があると言えるだろう。フィリップが主催するVTSの運営団体VUEのシークエンス・セットを参考にしつつ、各グループでは、それぞれの観点の兼ね合い、どの部分を優先するか、について盛んな議論が交わされていた。

4日目

4日目は、午前は各グループでのシークエンス作成が継続して行われ、午後は各グループが作成したシークエンスの全体発表と、フィリップからのフィードバックが行われた。時折、オルタナティブとしてフィリップから提案されるシークエンスをみて、何度も会場から「ああー……」という声（納得 / 疑問含め）があがっていた。シークエンス作成はVTSにまつわる様々な理論的枠組みがまさに「ヴィジュアル」として一挙にあらわれる瞬間であり、セミナーの中でも最もヴィヴィットな、そして同時に困難な学びの場面であったように思う。

これは半ば筆者個人の私見になるが、全体として美的発達段階の観点からの考察が思ったほどなされていなかったように思う。上記の**2)**、**3)**、2つのポイントに関しては、教諭、ミュージアム・エドゥケーター / ボランティアをされている受講者の方々には既に豊かな知見があり、細やかな議論がなされていたようだ。とすれば、コーディングに拘泥する必要はないとはいえ、一見抽象的な理論の枠組みに思える美的発達段階を自分のものとして自在に扱えるようになることが、VTS理解に関して1つのキーポイントになるのではないだろうか。



5日目

前日までのシークエンス・エクササイズで生まれた様々な葛藤に応じて、午前中は、改めて「作品選びの基礎原則」をチャート化し、詳細に検討することが行われた。「基礎原則」の各観点を、作品をみながら実際に数値化し、その根拠となる内容を記述することで、そもそも「基礎原則」の各項目が「何を意味しているか」を再考するきっかけとなり、また他者と比べることで、作品の捉え方の違いがはっきりと浮かび上がったと言える。ここでの取り組みはシークエンス・エクササイズの効果的な振り返りであっただけでなく、美的発達段階についての理解や、各人がどこまで作品をみているか、といったことについても同時に再検討を加えることが出来た。

午後は一転、VTSの応用性を考えるために、古地図、詩を用いた応用実践がアート・コミュニケーション研究センターの伊達、北野により、科学記事を用いての実践紹介がフィリップより行われた。非常にリッチな多義性を持つアート作品がVTSに最適であることはもちろんであるが、「学びの学び」、つまり学びについての汎用的な方法論でもあるVTSが、多様な分野のヴィジュアル・イメージに適用可能であることが体験できたのではないかと思う。

6日目

ついに最終日、午前は「批判的思考力」を筆記サンプルから分析するための、思考パターンのコーディング・エクササイズが行われた。批判的思考力は、より一般的な学習能力に関する基準であり、美的発達段階のコーディングとはまた観点を別にするものである。ここでは特に、学校教育における「評価」を可能にする方法として紹介された。ちなみに、STEP3初日に配布されたハウゼンによる論文は、VTSで培われた批判的思考力が、他分野での学習能力に「移行 transfer」することを検証したものであり、前日の応用実践と併せて考えれば、教育場面におけるVTSの応用の可能性について、想像を膨らませることができる。

午後は、ACOPの参与観察者である平野氏から、批判的思考力のコーディングに関して、より簡潔に行う方法（大きく「観察系」と「推論系」に分類する方法）が提案された。このコーディングに限らず、私たちがVTSについて考察し、実践するにあたっては、セミナーで得られた理論を基に、自分なりの枠組みを發明してうまく活かしていくことが重要であろう。

平野氏も強調していたように、VTSにまつわるあらゆる問題に関して、ひとつひとつ「間違っていないか」検討すること以上に、自分なりに一貫した枠組みをもって自発的に考察し、実践していくことが、特にSTEP3以降は求められることになる。それはつまりフィリップの問いを、私たちのものとして、今度は自分で発してみることである——“What more can we find?”と。

付記——アンケートから

ごく簡単ではあるが、最終日に行われたアンケートから受講者の声を一部紹介させていただく。上記レポートでも記述したように、コンディショナル言語、フレーミング、シークエンス・エクササイズ、コーディングとかなり複雑な内容が詰め込まれたSTEP3は相当ハードな行程であった。

「今回は前回の6日間と比べると自分の認識の浅さや課題（グループワークでのシークエンス作り、分析、コーチングなど）を実践していく過程でのつまづきが多かったと思う」

「未消化な内容が多く、混乱の渦中にあるが、その状況から今後のVTSの活動について考え始めるきっかけになったかもしれないと考えている」

このように、少なからぬ葛藤を抱えていた、という声が多数見受けられた。しかしそれは、単なるつまづきではなく、新たな課題発見、あるいはこれまでの学びの見直しへの契機であったとも言えるだろう。

「STEP1、2でみて、考えたことに、もう一度立ち返り、もっと考えられることはないか、あるいは今まで気づけなかったみることができるものはないか、ということをとにかく考え続けたセミナーでした（……）具体的なスキルについて、また知識について、何かを持ち帰るといよりは、それらをどうつかみとっていかを身につける場だったと思います」

「STEP2で、大きな流れ、理論の理解ができたものの、流れの中での、会話をどうパラフレーズするか、その意味や手法が疑問でした。それに多少なりとも整理でき、頭の中にイメージできたことが一番の収穫でした（フレーミング）。あとは、「シークエンス」です。これは、もう一度、頭を整理しながら、また実践の中から考えていきたいところです」

「今回参加して、VTSをとおして、自分のあり方に気づけたことが一番大きな気づきでした」

そして、既に新たな課題、発展的展開へ向けてのアクションも起こりつつあるようだ。

「これからやってくるボランティア育成（館のプログラムの一環）にどう応用してゆくかを、引き続き考えてゆきます」

「美術館、コンサートホールに来る来館者の興味をきっかけや入り口をサポートする企画を作っていくことや、人間関係、チームワーク、組織内のコミュニケーションにVTSを役立たせていきたい」

「VTSの哲学を使った（VTS的な学びのプロセスが起こる）プログラムの開発をしていきたいと考えています」

「これまでの教育システムとはちがうかも、とフィリップさんはおっしゃいましたが、学校教育の中でリアルに実践できる！という自身がついたと感じます」

また、ここでは挙げきれないほど、ほぼ全ての方が何らかのフォローアップや、互いの実践をシェアする機会を作ることが必要であると考えておられた。既に各地でイベントや勉強会の企画がなされており、これからは継続して連携が行われることで、非常に貴重なネットワークの形成が期待できる。

3つの問いを自分の仕方でも繰り返してみること。新たな問いを編み出してみること。そして、誰かに問いかけてみることに。「問い」は受け止めてくれる誰かがいるからこそ「問い」であることができる。一年におよんだ本セミナーが、誰かに問いのバトンを手渡せたのであれば、そしてこれからまたリレーを続けることが叶うのであれば、望外の喜びである。